

大阪公立大学工学部建築学科 3回生後期 建築設計演習Ⅲ 第1課題

「未来のメディアプレイス」

倉方俊輔、石山央樹、小林祐貴、西野雄郎、TA(M1)岸本結花

なにかを知りたいとき、学びたいとき、どのように情報を収集するだろう？

スマホでweb検索したり、インスタやTwitterにキーワードを

舐めたり、電子書籍を利用したりと、手のひらの中

で多くの情報が得られる。そう遠くない未来では、知識はこれまでと異なるものになり、その獲得方法も変わり、義務教育に代表されるような学習のあり方は変化を迫られるだろう。そのとき、多様なメディアが集積する図書館は、新たな社会をつくる起点になる可能性がある。これまでの「図書館＝本を読む場所」という概念を覆し、人々が読書し、学習し、居心地がよく、地域に開かれ、さまざまな人・情報・出来事に出会い、動く場＝「未来のメディアプレイス」を構想し、提案してもらいたい。

未来のメディアプレイスの兆しはさまざまにみられる。

たとえば泉大津市立図書館「シーブラ」は、移転にともない駅前の商業施設の1フロアをリノベーションして出来た図書館であり、誰もが利用しやすくなっている。館内ではイベントが毎日開催され、食事や会話もできる。地域の歴史が展示され、地域産業である綿製品を展示販売するスペースもある。「展示、飲食、ビジネス、イベントなど多様なスペースが複合する場に本や雑誌などがたくさん置かれている」とも言え、「図書館とはなんなのか？」と、従来の図書館概念を覆される、刺激に満ちたメディアプレイスである。

このように人や物や出来事や情報を媒介する場としての図書館は、他の用途と複合することで相乗効果が得られるのである。そのことによって図書館が地域施設、生活・業務施設として地域活動の拠点となり、地域コミュニティの活性化が図られ、能動的な地域づくりが展開する。

近年は様々な施設と複合しながら図書館の概念をアップデートしようと試みる建替え・改修が全国で活発に行われ、建築も運営もともに様々な試みが行われている。そうした多様な事例を調べてもらいたい。世界的にも、アラップ社が調査レポート「Future Libraries:WorkshopsSummaryand Emerging Insights」を発行し、未来の図書館では、人々の参加によって知識を得ること、協働と意思決定を可能にすること、などが重要であることを指摘している。

さて、課題の敷地は岸和田駅周辺を想定する。

岸和田市では有志の図書館職員や市民が、きたるべき図書館本館の建替えに向けて自主的に議論を重ね構想を練っている。これまでに、図書館はあらゆる分野の知識や経験につながるものであるとの考え方から、地域イベントの開催や動画クリエイター養成講座の開催、古民家の空き家再生など、見図書館と関係ないと思われる活動へと展開しており、図書館がもつ様々な物事を媒介する可能性の豊かさがみられる。

本課題は、未来のメディアプレイスをカタチとして提示し、議論を広げるための提案である。現実のニーズに取り組みながらも未来を見据えて大胆な提案を期待する。

●計画条件

敷地：岸和田駅周辺エリア（近隣商業地域、建蔽率80%、容積率300%）

施設：次のスペースを含むこと。

- ・図書館 :3,000～4,000㎡、約30万冊（うち開架15万冊）
*参考）現在の岸和田市立図書館 2,339.46㎡、約27万冊（うち開架14万冊）
- ・複合施設：複合する施設は自由に想定してよい。
地域特性やまちづくりのありようを読み取り、機能・規模を設定する。
図書館との積極的な連携、共同化、分担などを工夫する